

ネットワーク情報学部 プロジェクト発表会

SeNETech—パソコン自作情報サイト



代表: 佐藤智裕さん
担当: 石原秀男教授

魚とつくる仮想空間



代表: 永島太陽さん
担当: 佐藤創教授

平成17年12月17日
生田キャンパス9号館
5階アトリウムで開催

ネットワーク情報学部の3年次演習「プロジェクト」の発表会が12月17日、生田キャンパスで行われた。約600人が来場し、学生たちの成果に触れた。全22テーマのうち◇3E(Everywhere Everytime and Easy)Musicサーチ-音楽コンテンツの次世代検索手法-(代表:齋藤伸吾)◇はにわにわとり-会話するコンピューター◇SeNETech-パソコン自作情報サイトがベストプロジェクトに選ばれた。

はにわにわとり—会話するコンピューター



代表: 稲垣美香さん
担当: 香山瑞恵助教授

Pocket Information —カードから見る街のかたち



代表: 大河ひろみさん
担当: 栗芝正臣講師

経営シミュレーションゲームの製作



代表: 森由恵さん
担当: 坂本實教授

ネットワーク情報概論で音楽配信ビジネス学ぶ

タワーレコード 伏谷社長が講演

ネットワーク情報学部1年次生必修の「ネットワーク情報概論」の11月29日の講義で、音楽ソフト小売り最大手のタワーレコード(株)の伏谷博之代表取締役社長が講演した。

アルバイトとして入社後、マーケティング、eコマースサイトの立ち上げなどにかかわり、昨年3月から同社の最高経営責任者として活躍する伏谷社長は、音楽配信という新たなビジネスモデルが、「音楽生活を支えるインフラの提供」という同社のコンセプトにマッチしており、発展が期待できる分野であると話した。

「No Music No Life」のキャッチコピーで知られる同社は、米国でさまざまな話題をよんだナップスター社と、音楽配信業務に関する業務提携を行い、合併会社を設立。本年4月から日本市場での配信サービスをスタートさせる予定でいる。将来は、同学部での寄附講座も検討されている。

小林隆教授のプロジェクトでは、産学連携で音楽配信にかかわるビジネスを立ち上げる予定であり、タイムリーな講演となった。

情報科学研究所と共催シンポも

12月6日には、ネットワーク情報概論と、情報科学研究所(綿貫理明所長)共催のシンポジウムが行われ、同社の最高情報技術責任者である、竹中直純取締役と2人のエンジニアが講演した。

テーマは「インターネット関連の最新技術ならびに今後の方向性について」。GoogleとAmazonの比較、検索技術とプログラミングの重要性などを語った。



講演する伏谷社長



竹中取締役の講演

Froehliche Weihnachten — ドイツクッキーでクリスマス・パーティ

「シュテファニと楽しむクリスマス・パーティ」が12月10日、国際研修館で開かれ、留学生や日本人学生約20人が参加してクッキー作りに挑戦、ドイツのクリスマス気分を味わった。

ドイツの家庭では、ケーキよりもクッキー(プレッツヒェン)を焼いてクリスマスを過ごす。学生たちは、シュテファニ・リガーさん(国際交流事務課勤務)と法学研究科特別聴講生のカロリネ・ハウフェさん(マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク)二人の指導でドイツのクッキーを作り、焼き立てをいただきながらプレゼント交換をして楽しんだ。



楽しいクッキー作り(右端がシュテファニさん、左端がカロリネさん)

《留学生からのメール -9-》

日本の「当たり前」が通用しない

イペロアメリカーナ大学<メキシコ>に長期留学中 大西英明さん(法4)

こんにちは。私の大好きなたくさん仲間達をはじめ専大の皆さん、お元気ですか。早いものでメキシコに着いてから半年が過ぎました。

前学期は一番上のスペイン語のクラスに上がり、「メキシコの法の歴史」という学部の授業にも挑戦しました。この授業を通して純粋にメキシコの歴史的・宗教的知識も得ることができ、大変有意義なものだったといえます。もっとも、授業内容すべてを理解するにはまだいたらず、さらに語彙を増やさねばと日々、奮闘中ではありますが。



この国は、一つ道を歩けば貧富の差を痛いほど教えてくれます。物乞いに「銭」をねだられることも日常。地方で、言葉を知らない子供達と路上でサッカーを楽しんだこともあります。

そんな中でメキシコという国を考えさせられながら日々を過ごしています。また、私はメキシコ人の明るくて気さくな性格は本当に好きですが、一方で、カルチャーショックを受けました。メキシコ人が共通して持つ独自の価値観、悪い意味での適当さに正面からぶつかり、戸惑いました。これはカルチャー以前に道徳の問題なのでは? と思ったりもします。しかしここはメキシコ。日本での”当たり前”がこっちでは通用しません。そういった意味でこれもカルチャーショックなのでしょうか。

今この留学は、私をさまざまな角度から成長させてくれます。自分の甘さを思い知らせてくれています。この貴重な留学生活も残り半年。自分の納得いく形で留学を終えられるよう、精いっぱいやって帰国しようと思います。

タイ波災害・パキスタン地震

日本国政府「国際緊急援助隊」で活躍 二部法学部の福岡淳さん

周囲の応援で仕事と学業両立

二部法学部の福岡淳(あつし)さんは警察庁に勤務しながら4年間学業に励み、最後の学年末試験に臨もうとしている。

高校卒業後、「これからは通信の時代」と考え、専門学校で電子工学を学ぶ。警察庁入庁後、専門を生かし情報通信の仕事に就いた。「いつかは大学で学びたい」と思い続け平成14年、有職者入試で入学。3年次からは「先に専大に入っていた友人から『絶対にお勧め』と言われていた」家永登ゼミに所属し、親族・相続法を学んできた。



恩師の家永助教授(左)と

入学とほぼ同時期に警察庁、外務省、消防庁、海上保安庁、JICAなどから組織される「国際緊急援助隊」に選ばれる。2004年12月末のスマトラ島沖大地震発生に伴うタイ津波災害と、昨年10月のパキスタン地震災害に際し救助隊員として派遣され、捜索救助活動に必要な情報通信の確保にあたった。「自然の脅威」を実感したという。

「いつでも呼び出しに対応できるよう、24時間気を抜くことはできません。授業に出られない時には友人のサポートや先生方のご理解をいただいたと共に、職場や周囲からの絶大な応援もあって学業を続けてこられました。ゼミの雰囲気は先生のお人柄そのものでとても温かく、大学に通う大きな支えでした」と振り返る。

「ふだんの私の仕事は直接、市民の方とかかわるものではありませんが、警察のいわば、『神経系統』をつかさどっているという責任感をもって従事しています」と語る。

家永助教授は「彼の真面目さと仲間を思いやる心が、ゼミを盛り上げてくれました」と評している。